

津高同窓会報

発行所

〒514-0042 津市新町3丁目1-1

津高等学校
同窓会事務局TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

繋ぐ世代を超えて



同窓会長 飯田 俊 司 (昭和36年卒)

ていただきました。津高生全員が出席しました。スマホを使ったユニークな講演方法が大変好評でありました。

平素より同窓会活動に格別のご協力を賜り厚くお礼申し上げます。皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

今年には津高創立百三十五周年という記念の年に当たり、同窓会としても幾つかの記念事業を実施いたしました。

一月に同窓会名簿「あゝ母校」の発刊、四月にスペイン、ポルトガル、ベルギーへの海外旅行、五月にゴルフ大会(個人戦)を開催しました。十月には「有造塾」を開催、昭和五十五年卒の吉川慎二さんに「未来設計図」その作製と実現の方法」というテーマの講演をし

また、本部、東京、大阪、名古屋同窓会も講演会やアトラクションに工夫を凝らしたこともあって、出席者数も増え、関係者のご努力に心より感謝申し上げます。

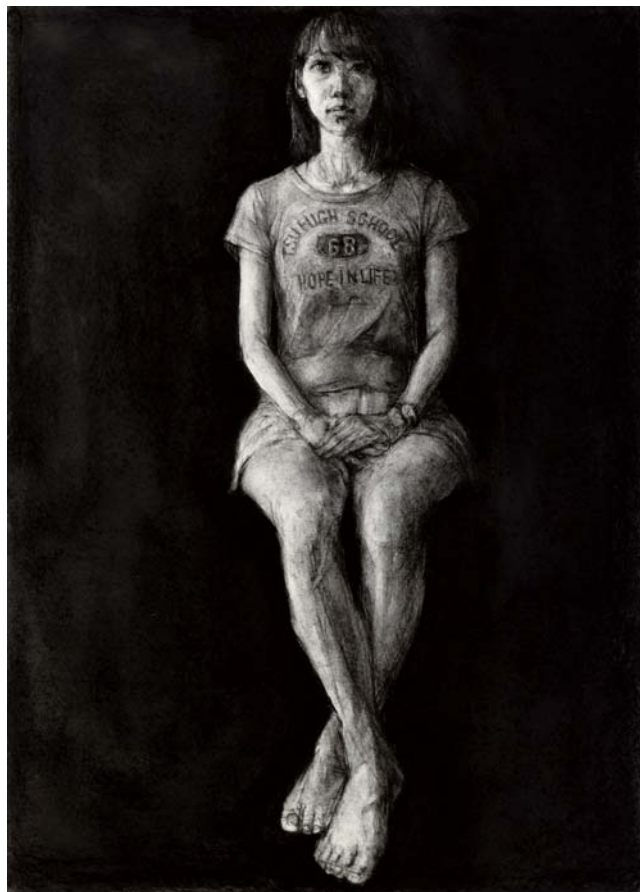
さて、平成二十七年の日本を振り返ってみますと、新聞・テレビなどマスメディアで「戦後七十年」という言葉が特に多かったように思います。

この七十年間、国際秩序はアメリカの主導で築かれ、日本もその恩恵にあずかってきたのが、近年アメリカの力の驕りが見られる一方、中国の目覚しい台頭で国際環境が大きく変化したこと、それと相俟って今国会では安全保障関連法案が成立しました。

経済面では中国に抜かれたとは言へ未だ世界第三位の経済大国であるのは、ひとえに勤勉で優秀な人的資源が豊富にあり、その国民一人ひとりが生活水準を上げるために猛烈に動いた結果であります。

世界が称賛するものの作りの底力と技術革新への熱意が結びついて、日本で開発された多くの商品が世界の人の暮らしを支えてきました。新幹線、ウォークマン、家庭用ゲーム機、

ご挨拶	2
百三十五周年記念津高同窓会旅行	2
百三十五周年記念ゴルフ大会	2
シニアの部で優勝して	3
同窓会名簿発刊	3
終戦後七十年を迎えて	3
想い出さまざまに	4
米寿と喜寿の師弟のクラス会	4
亡夫の自慢とおノロケ	4
津高と音楽と同窓会と	5
新しい三重大学を創る	6
ロサンゼルスに住んで感じた事	7
太陽と発展途上国支援	7
ジャカルタ津高OB会	8
副会長就任のご挨拶	9
津軽三味線に魅せられて	9
百三十五周年記念有造塾開催	10
進路状況	10
各地で同窓会開催	10
物故者	11
平成二十七年同窓会パーティー	12



「坐」 絵 倉 岡 雅 (昭和46年卒)

タイトル・書 工 藤 雅 俊 (昭和45年卒)

ご挨拶

学校長 小野 芳孝



会員の皆様には、ご壮健にてご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、本校教育活動に様々なご支援、ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。津高の校長に就任し、三年が経過します。この間、同窓会の様々な催しに

参加の機会を得て、会員の皆様が母校をこよなく愛し、強い結束力を持った素晴らしい同窓会であるという強い印象を持っています。今後も津高の歴史と伝統を大切にしながら、創立百三十五年を迎えさらなる発展のために、努力を惜しまず頑張っていく所存です。さて、本校では現在、全生徒に学年を超えたつながりを意識させ、津高生としての一体感を醸成するために「先輩から後輩への生徒文化の継承」を目的として他校ではあまり見られない特徴的な取組を行っています。少し紹介

させていただきますと、①一・三年生の生徒が同じクラス番号の一年生(新入生)に高校生活全般を語り、新入生の質問に答える「縦割りディスカッション」、②その縦割りで「団」という単位を組織して実施する「体育祭」、③毎朝八時三十分から五分間行つ「校歌の校内放送」等の取組です。こうした取組を通して、津高生が在学中から一体感や母校愛を醸成し、卒業後も誇りを持って社会に貢献するリーダーとして活躍してほしいと強く願っております。

今年度の部活動等での活躍をご紹介します。県総体の学校対抗総合成績は、男子が四位、女子が十一位でした。詳細は、ポート部(男女とも総合優勝)、

陸上競技部(三段跳び)のインターハイ出場をはじめ、硬式テニス部男子、陸上競技部(六種目)、水泳部(八種目)、ポート部(男子シングルスカル、舵手つきオドルブル)が東海大会に出場しました。一方、文化系クラブでは、書道部三年生黒宮千聖さん、新聞写真部二年生松本里歩さん・一年廣真琴さん・小坂彩夏さんが第三十九回全国高等学校総合文化祭滋賀大会に出場、音楽部が第八十二回NHK全国学校音楽コンクール三重大会で金賞を受賞し、東海北陸ブロックコンクールに三重県代表で出場、SSC(スーパーサイエンスクラブ)地学部会の三年生角谷優馬さんがブラジルで開催された国際オリンピックに特別派遣生徒として出場

生物部会の三年生片石健太郎さんが日本生物学オリンピック二〇一五本選(広島大会)に出場し、銅賞を受賞するなどの活躍がありました。また、個人では、二年生田嶋あいかさんがクライミングワールドカップ中国・重慶大会に日本代表として出場(七位)、一年生駒田早代さんが津軽三味線の全国大会で、プロも交じる「A級女性の部」で優勝するなど、すばらしい活躍を見せてくれました。

会員の皆様におかれましては、今後とも母校に対するご支援をお願いするとともに、ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。ご挨拶いたします。

創立(百三十五)周年記念事業

盛大に無事終了

百三十五周年記念津高同窓会旅行

丸山 憲一(昭和41年卒)

「お客様の中心にお客様はいらっしゃいませんか？」関西国際空港を離陸して三時間後の午前二時半のトルコ航空機内。女性客室乗務員のひきつったア

ナウンスが乗客の眠りを破った。急患発生の緊迫した状況で、津高校創立百三十五周年記念スペイン・ポルトガル・ベルギー三か国の旅が始まった。患者

は我々グループではなく、幸い三十分で様態は治まり、機は一路中継地のイスタンブールへ。

四月二十日から十日間の旅には、昭和二十四年卒から四十七年卒まで、家族の方を含め飯田会長以下十四人が参加。出発直前にキャンセルが相次ぎ、催行が危ぶまれたもののぎりぎりの人

数で実施された。

初参加の私は、最初の訪問国スペインの日程で「なぜブラド、ガウディは見られないの？」と疑問に思ったが、これは私の思い違いとすぐ分かった。この旅は定番の名所巡りを避け、日本人があまり行かない所や隠れた魅力たっぷりの場所を訪れ、「巡礼の旅」の趣も濃いものだった。

同窓会事務局のプランナーとJTBの担当者が練に練った企画だそうで、サンチャゴ、ウィーゴ、ポルトなどの



世界遺産を回り、中世の教会の威容、威厳をまざまざと肌で感じた。ヨーロッパの歴史に触れ、津高時代にもつ

と世界史を学んでおくべきだったと、勉強不足を反省させられたのも事実。

現地在住の日本人ガイドさんが「ぜひ見に行つて欲しい」と予定にない場所も案内してくれ、素晴らしいヨーロッパの街並みなどを楽しんだ。「明日はどんな所を回るのだろう」と夜、ワクワクしたほどだった。列車、船での遊覧、水の都ブルージュの運河巡りなどヨーロッパの素晴らしさを満喫した。

サブタイトルに「緑濃き美食スペイン」とあったが、各地での食事はおいしく、JTBが店を厳選した努力が感じられた。さらにビール、ワインはどの国も格段の味わいで、国別、銘柄の違いを堪能した。



今回の旅は最高齢者が八十四歳。ほとんど知らない人ばかりだったが、旅を続けるうちに家族同様の親しさが増した。これがこの旅の一番の収穫だった。

百三十五周年記念ゴルフ大会 シニアの部で優勝して

松本 守弘 (昭和33年卒)

同窓生とのプレイということで、何の気兼ねも気負いもなく、気楽に楽しくラウンド出来た上に、シニアの部で優勝させていただき、嬉しい一日となりました。当日はインからスタートで前半のスコア42でしたが、内容がバーディあり、パーあり、ボギーあり、ダブルボギーあり、そしてトリプルボギーまであるという波瀾万丈でしたので、同伴者に後半30台でラウンド出来て運が良ければ、良いネットスコアが出るかも知れないなあ、と厚かましい

たのではないかと思います。その根底には「津高の絆」があると確信した。時間に余裕のある方には、次回以降の旅に参加をお勧めしたい。

希みを口にしていましたが、スコア38でラウンド出来たので、集計を楽しみに待っていたところ、ペリアの隠しホールにトリプルボギー、ダブルボギー、ボギーが入っており、バーディは入らずという全くの幸運に恵まれて優勝することができました。

私達、昭和三十三年卒業生は「津高33会」と名付けて、約四十年間ゴルフコンペを続けており、後期高齢者の仲間に入ってから、暑さ・寒さを選

同窓会名簿発刊

本年一月に会員名簿を発刊いたしました。

名簿は五年ごとに発刊し、同窓会員の皆さんに販売いたしております。津高同窓会員の絆をより一層深め、お役にたてるようにと思っております。まだたくさん残っておりますので多くの会員の方にお買い求めいただきました。お願いいたします。

お申し込みは、津高同窓会事務局

(〇五九一二九一七三三)



て年六回(春三回、秋三回)開催しています。

津高同窓会主催の創立記念大会や学年対抗大会にも参加して、八十歳代の大先輩方の元気なプレイに接して英気をもらい、私達も諸先輩方のように八十歳になっても元気にプレイすることを目標にして来ましたが、目標にされる年代になってきたようです。

足・腰等が弱り、ボールが飛ばなくなり、バットが入らなくなっても、スコアは気にせず、楽しくおしゃべりしながらのプレイを続けて元気を保ち、津高同窓会の主催するコンペには必ず参加しようと思っております。

大会開催のために種々、尽力下さった役員の皆様と事務局にお礼申し上げますとともに今回参加された皆様は次回大会にも参加されますよう、ご健勝をお祈りいたします。

終戦後七十年を迎えて

三 木 清 己 (陳川・22年卒)



同窓会に一度も出席していない私に突然投稿依頼があり驚いています。

私が津中を離れてから七十年が経ちます。昭和十八年に大阪から転入致しました。転校してからは時節柄教室で授業を受けた記憶に乏しく、桃園地区の暗渠排水や半田地区の地下工場を掘りに行ったり、その後は四日市や名古屋の工場へ飛行機の部品造りに派遣されました。当時の事として食糧事情悪く栄養失調から心臓脚氣を患い一時帰宅を指示されました。ところが帰宅早々担任の先生が来宅「この戦時中に休むとは怪しからん、下級生が県立図書館の疎開に行っているから監督に行くよ」と云われ、翌日(昭和二十年七月二十七日)早速に出向いた所、空襲に逢い被爆しました。街も被害を受け医師も薬もなく生死の間を彷徨つ羽目になりました。

右上腕と肩の骨折、右背中に数十発の爆弾の破片が刺さり、左臀部貫通で鈴鹿市の病院まで搬送され応急処置を

受けました。そこで二度死の宣告を受けたのですが、縁があって佐世保市の米軍基地からベニシリンを手する事が出来、死を覚悟で佐世保市民病院に運ばれ十二回の手術の結果一命を取り留める事ができました。その間、津中からは何の連絡もなく死した事になったのか？名簿から消えていました。

津高の火事の後、津中の同級生が寄付を集めて来訪、約二年足らずとは云え共に汗を流した人達が私のことを覚えていて呉れた事に驚きました。その後、津高の名簿を汚す事になったようです。

進級の遅れるのが気になり、病院から地元の佐世保中学へ通い何とか一年遅れて旧制中学を卒業することが出来ました。

その後、三重県立医科大学の試験に合格したものの、面接で「そんな手で医師になるのは無理」と云われ「予科三年の間に右手が肩の高さまであがるように努力出来るなら」という条件で入学を許可されました。それから三年間、鉄一つで被災地の瓦礫を耕し、一段百姓を続けて約束を果たし医学部に進むことが出来ました。

その間、多くの方々との並々ならぬご支援や励ましを頂き立ち直る事が出来ました。その事が私の一生の宝であり

励ましとなり力となりました。その後は不自由な体を健康な人と同じように使いこなす事が何よりの恩返しになると努力して来ました。

昭和三十年医学部を卒業、昭和四十四年三重大学眼科助教授を最後に現在地で開業いたしました。〇歳から十二歳までを主な対象に、手間が掛かりますが、児童福祉に繋がる「弱視・斜視」の治療を手掛けたのも自身が受けた事への恩返しと考えての事です。

九死に一生を得て人生学ぶ事が多くありました。「人間万事塞翁が馬」八十六歳になって未だに診療が出来、趣

想い出すままに

赤塚 たみ (昭和18年卒)



昭和十三年四月、紺色のセーラー服に臙脂色のネクタイ、三重校の校章を付け胸をよきめかせて三重県立高等学校に入学致しました。

二階建の校舎は二棟あり、南校舎一階に私達の「一年は組」の教室がありました。南窓からは明るい日光が入り、広い運動場と道路を隔て尖塔に十字架

味のゴルフで昨年エイジシユートも出来ました。

助けて戴いたこの身体で人並みの事をしなくてはの一念が、ここまで支えて呉れたと感謝しています。

附記・昭和二十七年、現天皇陛下が成年のご報告に伊勢神宮を参拝された時、神宮広場で三重県下学生代表として祝辞を述べる。

平成四年より三十年間三重県眼科医会長。

平成二十三年園遊会の招待を受ける。「今日在るを知りて 景色の美し」

え、焼けるように熱い砂浜を走って海に飛び込みました。思っ存分泳いだり、水を掛け合って楽しく過ごした後、学校への帰途は疲れ果て、皆黙って炎天の南瓜畑の道を学校まで帰りました。

経ヶ峰登山では手を取って引き上げて貰ったり、学年対抗の香良洲リレーではバトンを落とした友達を慰めたり、四年生の東京旅行は伝統行事を楽しみ

米寿と喜寿の師弟のクラス会

故 西 井 晃 (昭和31年卒)

中谷先生に担任してもらった昭和三十一年の卒業生のクラス会がある。三十年ほど前、近藤 晃、藤岡(野崎)美也子(同窓会副会長)等が言い出したのが始まりらしい。

昭和四十五年頃、まだ卒業生名簿が整備されてなく、図書館に卒業生全員の五十首順のカードが保管されていた。その中から三十一年の卒業生の名前と住所を選び出し、五百名の名簿を作り、二、三年に一度学年会を開催していたよつだ。その間にクラス会も開かれていたらしい。

平成からは奇数年度の秋に学年全体の同期会が開催されることになり、偶数年度には昼食会を開いている。徐々に参加者は減ってきたが、十人二十人の参加者で途切れることなく永續きしている。昼食会なので遠方の人は親戚や実家に、又は友人同士で一泊し観

ました。そのような学生生活の中で、生きるルールを覚えていったように思えます。

卒業後、戦争での空襲、物資の不足等の苦難の日々を越え、今のよつな穏やかな世を迎えました。若き良き日を過ごさせて頂いた母校とお友達に感謝しつつ、余生を過ごしたいと存じます。

光などを楽しんでいる。

一泊の会をとの話もあったが、世話人が計画設定にしり込みをし実行出来なかった。ところが平成二十六年に中谷先生が米寿、われら生徒が喜寿を迎えるにあたり、これを機に一泊の会をしよつと、西井、近藤、西坊(山口)、守屋(田中)、藤岡(野崎)などが榊原温泉一泊二日のクラス会を計画した。卒業時担任クラスでなくても、一、二年生で受け持ってもらった人にも声をかけたところ、二十人が集まった。

亡夫の自慢とおノロケ

伊 藤 淳 子 (昭和39年卒)

ウィンドシールドいっぱい真っ青に広がる青い空がぐるりと一転し、私達の予期せぬ人生が始まった。

また海外旅行も留学も一般的でなかった一九七六年、東大工学部の博士課程を終えた津高で同級だった洋は、私と



中谷先生に花束を贈り、楽しく歓談し、宴会は夜の更けるまで続いた。親睦も深まり有意義な一日間を過ごした。「以前は喜寿の人を老人だと思っていたが、自分がその年になってみると老人扱いにされるのは不愉快だ」の感想も聞かれた。

これが中谷先生を招いての最後のクラス会になるだろうが、参加出来た幸せを感じる集まりであった。

西井さんはこの原稿を書き上げて間もなく、逝去されました。ご冥福をお祈りします。



共にニューヨーク州シラキュースに大
学研究員として赴任した。その五月
後、休暇中のカナダで交通事故が起こ
った。幸いな事に洋に大怪我は無かつた
が、私は首を折り、神経が切れて胸か
ら下と両腕両手が動かせず感じずの永
久的な完全麻痺となった。人とは果て
しない善意を奥に秘めているのだとい
う事を、この事故を通じてつくづく知
る事になる、ほんの始まりだった。頭
の両側に開けられた穴から十キロの重
りで引っ張られ、痛みの中、身動き出
来ない日々が三か月続いた。坊主頭で
横たわっている私の首に、洋が小さな
ダイヤのペンダントを照れ臭そうに掛
けてくれた。私が女として妻として一
番自信を無くしていた時に、彼は結婚
以来初めて宝石を買ってくれたのだっ
た。七か月して私は退院した。元来寡
黙で「男は黙って」の文化の中で育っ
た洋には、「男も喋って」の中の仕事
で疲れて帰宅してもまだ私の世話とい
う日々が待っていた。将来の事も不安
な苦しい日々が続いた。私の耐久力が

徐々に続いてきたシラキュースで四年
目の一九八〇年、シリコンバレーのサ
ンホゼにあるIBMの研究所から、と
ても良い条件で誘いがあり、私達は西
へと向かった。ノーベル賞受賞者も出
た研究所では、同僚は有能で雄弁、強
烈な性格の人が多かった。でも、相変
わらず「男は黙って」の洋なのに、良
い友人も出来た。腕が曲がるようになっ
ていた私は、手のひらに筆を取り付け、
水彩画を描き始めていた。時間はかかっ
たが、四年間たまっていった何かが溢れ
出るように絵を描いた。そんな中、洋
は絵を描き易いよう工夫もしてくれた。
何処でも私には同情と愛情が注がれた
が、彼の苦勞は影になっっている事が多
かった。ある晩何時になく遅く帰って
きた洋は、とても興奮した面持ちで
「出来たよーっと出来たよー」と言っ
た。私には何が出来たのか解らなかつ
たが、その頃から彼は、会社内外で賞
を受けたり学会での講演に招かれたり、
どんどん忙しくなっていた。IBM七
年目、私達は、高台にあるプールとジャ
グジー付きの家を買った。

四十二歳のある朝突然、
東大工学部の教授として
来ないかという誘いを
受けたが、幾日かして洋
は私に、「行かない事に
した」と言った。当時の
日本には、まだ訪問介護
や介護保険はなく、身体
障がい者に関する総てが

ずっと遅れていた。

時が経ち、洋の研究分野に詳しい人
達から、「主人は大変な発明をなさつ
たんですよ」という、信じられない言
葉を聞くようになった。もっと信じら
れなかったのは、「アツコの笑顔を支
えて自分は毎日頑張れる」と言ってい
ると聞いた時だった。彼がアメリカの
化学会の賞を頂いた時はワシントンへ
二人で招かれ、華やかな授賞式に臨ん
だ。この頃になってやっと私は、彼が
何をしたのか解ってきた。IBMも、
研究者として数少ない最高の肩書と扱
いをしてくれた。それから二年後、彼
は胃癌の宣告を受けた。

ある日彼はいつになく真面目な顔で、
「もう一度生まれ変わる事があって、
全く同じ人生を送る事になっても自分
は良いと思っている。事故も含めてだ」と
言った。事故後は何もしてあげられ
なかった私に、何という優しい思いや
りだろう。彼は勇敢に癌と戦った。う
わ言の様に「アツコを残して死ねない」
と言っているとお医者様から聞いた。
最後の最後まで研究に情熱を注ぎ、部
下の面倒を見、二〇〇九年、結婚四十
周年の早朝、六十三歳で息を引き取っ
た。起き上がって彼を抱きしめる事も、
彼の傍に身を寄せる事も出来ないのが、
私にはたまらなく辛かった。

会社は彼が愛した研究所で働く機会を
してくれ、化学界誌は追悼文を掲載し
てくれた。一年後に私は、人生の半分
を過ごしたアメリカを後に、母国に戻っ

た。その年、彼の津高サッカー部時代
の親友を筆頭に、同期生の仲間のお世
話で、彼の死を悼む大勢の方たちが集
まり、日本での偲ぶ会をして頂いた。
二〇一三年、日本のノーベル賞と言わ
れている日本国際賞を、洋の米人共同
研究者が受賞する事になった。この賞
は洋が故人であるため正式の受賞者で
はなかったが、代わりに私がお招きを
受け、晩餐会の後、共同研究者夫妻と
共に天皇陛下に拝謁し、洋を悼むお言
葉を頂いた。受賞理由は、半導体を超
微細で高性能、低コスト化することに
欠かせない化学物質を発明し、その結
果、パソコン、携帯やスマートフォン、
胃カメラなどの医療機器、車に搭載さ
れている電子機器などを可能にし、人
類に貢献したというものであった。こ

の発明がなかったら、スマートフォン
は4メートル四方、十数億円になる。
それから二年後の今年六月、津高同
期生たちの協力を得て、念願の洋と私
の二人展が三重画廊で実現した。洋は
シラキュースやカリフォルニアの美し
い自然の風景写真や、花の写真、それ
と私の水彩画が出品作だった。記録的
な大盛況で彼の写真は絶賛を浴びた。
遠くはシラキュースから、青森、鹿児
島からも、多くの旧友、そして同期生
達が駆けつけて下さった。大勢の方に
彼の知らざる一面を見て頂いて私は思
いを遂げた。凝縮した短い人生を情熱
を持って生きた洋は、あの世から私を
見守ってくれている。だから私はこれ
からも周りの人達に支えられながら、
強く明るく生きていけると思う。

津高と音楽と同窓会と

前 迫

實 (昭和42年卒)



ていましたが、音楽担当の市川紀子先
生から「津高に今年東京芸大を卒業さ
れる素晴らしい先生が赴任されるから、
音楽をやったら」とのお話を頂きま
した。

入学式の阿南先生の歌声を聞いた瞬
間、音楽室へ向かっていました。

NHK合唱コンクールに参加が決ま
るとトレパン・トレシャツで腹筋・発
声と猛練習が始まり、瞬く間に三重県
代表となっていました。勿論合唱

東京オリンピックの年。昭和三十九
年四月津高入学式が私の音楽の原点で
す。

中学時代はバレーボールに明け暮れ

では婚約者の古堅先生や自由曲「かごのつて」の作曲者で「大地讃頌」などでも有名な芸大同期の佐藤 眞先生も東京から来て頂き大変恵まれた環境でした。残念ながら僅差で東海北陸代表は逃してしまいました。

秋の文化祭では阿南先生から「今まで前例が無いらしいが男子の独唱を」と言われ「帰れソレントへ」を選びました。これが人前でカンツォーネを独唱した最初でした。

さて、昭和三十九年に戻りますが、暮れには阿南先生が名古屋フィルで「第九」を見事に歌われ、翌四十年お正月にはNHKラジオでシュベルトの「白鳥の歌」が全国放送された直後の一月十日の夜。野球部顧問で地学の辻先生と一緒に津高校門前でタクシー

にはなれ、お二人とも亡くなられたのです。

私は登校前に樋口病院に見舞い、校内放送で訃報を聞きました。人生六十七年の中で、あの時ほど号泣したことはありません。そして何故か一年坊主の私が音楽部を代表して全校アッセンブリーで想い出を語りました。

市川校長の計らいで後任に婚約者の古堅先生を迎え、開通して間もない新幹線で一年余り週の半分を津高と音楽部のために通って頂きました。

ピアノは勿論、音楽の基礎も何もない少年が三年生になる頃には勝手に何浪しても阿南先生の後を継ぎたい一心で芸大受験を古堅先生に相談しましたが、やむなく受験を断念するに至りました。

ちょうど三年生になった時、後に世界のテノールとなった山路芳久君が入学してきました。

指導者がいなくなった音楽部は部員が激減し、全日本合唱コンクールではテノールは彼と二人で出場せざるを得ませんでした。

昭和六十一年には私の勤務地の埼玉県坂戸市の市長から市制十周年記念の「第九」を立ち上げて欲しいとの要望に応えて、今では考えられないようなソプラノ佐藤しのぶ、アルト西明美、テノール山路芳久、バリトン木村俊光、オーケストラ読売日本交響楽団の超豪華メンバーで盛り上げてくれました。

さて、本格的に音楽を習う人達が多い中、誰にも師事せず、単身赴任の時もカーステレオでカンツォーネを聞き

ながら次第にレパートリーも増えてきました。赤坂プリンスホテルでのディナーショーやソロコンサートなども重ねて平成十四年に日本カンツォーネ協会主催の第一回全国ナポレターナコンクールに出場し、日本レコード大賞の審査委員長だった伊藤 強さんから最優秀歌唱賞を頂きました。

サラリーマンを続けながら土日のイベント等に出演していましたが、段々平日や夜の話も増えてきた平成十八年早期定年退職、歌手としてやっていこうと思い第五回全国カンツォーネコンクールに出場し優勝させて頂きました。

津高東京同窓会へは二十年以上前に音楽部の仲間を中心に十数人が参加した時、折角だから学年同期会をやるうという事になり、昭和四十二年卒三

の時に、愛用の聴診器を入院中のお子さんにプレゼントいたしました。少し大げさではありますが、医師の命でも言つべき「聴診器」をプレゼントしてしまい寂しく感じました。

しかし、学長に就任後六ヶ月が経ちました現在、学長モード百%で、大学の中期目標・中期計画の策定、地方創生と地域の活性化、機能強化構想・組織改革と一体化した概算要求の申請、産学官連携等に努力しています。不安感と緊張感とともに、体中にみなぎってくるエネルギーとわくわく感をもつて教育研究活動が推進できる大学を創

十九年入学なので「4239よにさく会」と命名し、以来細々ながら毎年継続しています。昨年東京同窓会の学年幹事を仰せつかった時にアトラクションとして歌いました。

また、一年先輩の脇田允夫さんにイベントに呼んで頂いたり、小生の出演するコンサートにも来て頂くなど東京同窓会での縁が続いており感謝にたえません。

今年は音楽部の一年後輩で大阪から参加の土屋(森)久美子さんと五十年振りに感動的な再会することができました。

二万五千部の津高同窓会報が、どこかで懐かしい新しい出会いを、ご縁を繋いでくれることを期待しております。

(カンツォーネ歌手)

新しい三重大学を創る

駒田 美弘(昭和45年卒)



昨年の十一月二十七日の三重大学学長選挙会議において第十二代学長(任期六年)に選出され、本年四月から学長の職務に専念しています。昭和四十

五年に津高等学校を卒業し、三重大学医学部へ進み、昭和五十一年に医学部卒業後は小児科医(小児血液腫瘍学専門)として三十九年間を過ごしました。平成十一年からは同大学小児科学教授を拝命し、小児科学の教育・研究、三重県の小児医療の発展に微力ながら関わって参りました。学長拝命にともない小児科教授を辞さなくてはならず、小児科教授室の整理をしながら小児科学教室の同門会年報を読み返してみま

したが、様々な出来事が思い出され、少し感傷的になってしまいました。第六代の学長を務められました恩師の井澤 道先生は、「無為自然」という老子の根本思想を生活の指標とされておられました。人によって自然を乱すことのないように、なるべく抑えた生き方をすること、世の中にはそもそも自然の流れというものがあることに逆らうことなく、その流れに従順に生きるのが一番良いという考え方です。いつもそのように行動することは難しいとは思いますが、心に留めておきたい言葉だと思っています。また、三月末の最終の附属病院小児病棟回診

の時に、愛用の聴診器を入院中のお子さんにプレゼントいたしました。少し大げさではありますが、医師の命でも言つべき「聴診器」をプレゼントしてしまい寂しく感じました。

りたいと思っています。国立大学は平成十六年に法人化され、第一期目が「法人制度の始動期」、第二期目が「改革の本格化」の時期とすると、平成二十八年度からの第三期目は「独り立ちの時期」と位置づけられ、三重大学には自らの力で改善・発展する仕組みの構築が求められます。八月中に、県内二十九市町すべての首長さんから各市町の課題を直接お聴きし、少子高齢化、人口減少が凄まじいスピードで進み、地方創生、地域の活性化が待った無し状況にあると強く感じました。各市町の課題を踏まえて、三重大学がその機能強化を推進するビジョ

ンを、「①教養教育を充実させ、四つの力(感じる力、考える力、コミュニケーション力、生きる力)を発揮し、社会を牽引するリーダーを養成するとともに、学部専門教育、大学院教育の推進を図り、高い教養を持って地域社会で活躍する高度専門職業人を養成する。②地域イノベーションの拠点として、産学官連携を推進し、研究成果の社会還元を通じて、大学主導の地方創生に取り組むとともに、特色ある研究分野において、全国・世界から注目される情報発信・研究拠点化への展開を図る」こととしました。

そして、このビジョンを推進実行し

ていくための戦略を「①地域人材育成と若者を地域に止め置く機能の強化、②研究成果を地域に還元する機能と地域の様々なハブ機能の強化、③地域の力の発信機能の強化」の三つとし、その戦略の実践のための各学部等の取り組みを一つの機能強化構想のパッケージにまとめました。今後は、このビジョン、戦略、取り組みに沿って、三重大学の機能強化を展開し、地方創生、地域イノベーションを目指す新しい三重大学創りに精一杯の努力をしていきたいと思っています。

(三重大学学長)

ロサンゼルスに住んで感じた事

作花 康 夫 (昭和58年卒)



ゼルスに行く決心をしました。

昨年五月に米国販売子会社勤務となり、ロサンゼルス近郊に駐在する事になりました。一人息子は中学生の難しい時期でしたが、グローバル文化に触れる昨今、若い時にアメリカ文化に触れる事も本人にとってプラスになるのではないかと思います、家族全員でロサン

ゼルスに行く決心をしました。ここロサンゼルスは、米国の中でも最も多種多様な人種が住んでいる地域と言っても言い過ぎではないでしょう。街を歩いていても、いろいろな言語が聞こえてきます。このような状況に身を置くと、どうしても自分自身が日本人であることを強く意識します。街を走る乗用車の半数近くは日本製で技術立国としての日本の存在感を示しており、さらにアニメ、日本食まで様々な分野で日本文化が根付いているのは、日本人として誇らしく感じます。一方、日本が十数年前まで市場を席捲していた

電化製品の分野は諸外国の製品に取って代わられています。日本企業のプレゼンスが徐々に低下している現実には一抹の寂しさを感じざるを得ません。

ロサンゼルスでは、中国人、韓国人を中心とするアジア人が日本人の十倍以上住んでいると言われています。彼らに共通して言える事は、非常に勉強熱心でチャレンジ精神が旺盛な事です。日本人の勤勉さも世界的に評価が高いですが、彼らは新しい事に挑戦するチャレンジ精神が日本人よりも強いように感じます。彼らの多くは自国に戻るといふ選択肢を考えておらず、米国で勉強、仕事に励み、より良い職を得て成功したいという思いが強いのです。

一方、日本人は一時滞在の駐在が主

太陽と発展途上国支援

上野

悟 (平成2年卒)

一九九〇年に津高を卒業しました上野と申します。私は現在、京都大学大学院理学研究科の附属施設の飛騨天文台で、太陽物理学の観測的研究に携わっております。今回は、その仕事の中でも、外国、特に発展途上国と連携した国際共同プロジェクトについて、少し紹介させていただきたいと思えます。

皆さまご存じの様に、地球の自然環境や気候は、そのエネルギー源である太陽の活動状況に大きく依存していま

流なので、私も含め常に日本の本社意向を意識しながら仕事をしているのが現実です。何か新しい事にチャレンジするよりも、日本に帰国した時の自分のポジションが気になるのです。このような現状を目の当たりにすると、何か日本人が乗り遅れているような気がしてなりません。前述の日本企業のプレゼンス低下もこの事と関係があるような気がするのです。

自国に戻らず、退路を断って米国社会に溶け込むとする彼らと比較する事自体に無理があるかも知れませんが、私にはどうしても日本人が保守的で、チャレンジ精神、積極性にやや欠けているように見えます。日本人固有の気質も影響しているかも知れませんが、

す。特に地球の電離層や磁気圏の環境はその影響が顕著で、太陽から常に吹いている風の圧力の変化や、太陽爆発(フレア)で吹き飛ばされてくる電磁気を帯びたガス塊、紫外線やX線の放射量の変動などにより、大気温度や密度が大きく変動したり、地磁気嵐、オーロラと言った現象を引き起こしたりします。さらに、より長期的には、太陽の黒点や爆発現象の多い時期には、地球全体の気候は温暖化し、少ない時期には寒冷化する、と言った統計結果

日本の高度成長期に働いていた私の父親の世代を見ると、今の日本人が失ってしまった、遅しき、チャレンジ精神、積極性というものをしっかり持っていたように感じます。日本が経済的に豊かになった時代から、徐々にそれらの精神が失われてしまったのでしょうか。最近、日本経済の閉塞感という論調をよく耳にしますが、今こそチャレンジ精神、積極性を取り戻す時期に來ていると思います。

駐在員としてまだ一年半しかロサンゼルスに滞在していませんが、日々の業務の中でその思いを強く感じ、筆を取った次第です。

ロンシールインコーポレイティッド (ロンシール工業)

も報告されています。

京大・理・附属天文台は、そのような宇宙・地球環境変動の源となる、太陽からのエネルギー解放過程の研究に近年重点を置いており、その一環として、太陽全面を監視し続けるグローバルな国際共同観測ネットワーク(CHAINプロジェクトと呼んでいます)の構築を目標として活動を行なっています。また、ここで用いる太陽望遠鏡は、近年プロフェッショナルな目的で建設される各種天体望遠鏡と比べると、格段に安価・コンパクトであり、予算や人員が特別豊かな研究教育機関でなくとも比較的導入・運用しやすいこと、また、この宇宙・地球環境変動



ペルー国立イカ大学に設置完了した太陽望遠鏡の前で
現地の学生たちに使用法を説明する筆者

の研究は比較的新しい学問分野であり、今まで天文学研究の実績が少ない機関でも新規参入して結果を出しやすいことなどから、当プロジェクトは発展途上国の研究教育機関にとっても利点が大きいため、私たちは、「発展途上国への国際学術貢献」と言つて観点からも、このプロジェクトを推進してきています。

例えば、二〇一〇年三月には、その海外第一号望遠鏡を、南米ペルーの国立イカ大学内に設置しました。その望遠鏡を運用する過程を通して、現地の若手研究者たちに対し研修・講習を行い、共同研究を立ち上げました。ペルー国内には、未だ天文学を専攻できる大学院が存在しませんが、先日、彼らの中から一人、大使館の試験をパスし、

天文学の博士号を取得するために二〇一六年四月から京都大学の大学院博士課程に留学することも決まった所です。

一方、サウジアラビアのキングサウド大学からも、このプロジェクトに参加したいというオファーを頂き、二〇一四年度、私たちは日本の望遠鏡メーカーと連携して太陽望遠鏡の製作、データ蓄積・解析システムの準備をし、同年十二月に望遠鏡一式の現地設置作業を行ないました。丁度この原稿を書いている二〇一五年十月の下旬に、もう一度現地に渡航して、最終的な機械調整や現地研究者への講習後、その望遠

ジャカルタ津高OB会

稲垣 一 洋 (平成8年卒)

昨年十一月一日、ジャカルタ津高OB会が日本から約五千八百キロ離れたインドネシアで産声を上げました。ジャカルタには約一万八千人の日本人が在留しているとされており、日本人コミュニティも年々増えてきています。その中で各県人会があり、三重県人会の中で知り合った津高出身者を中心に、その知り合い、そのまた知り合いで津高OBを探し、ジャカルタ津高OB会の発足となりました。

ジャカルタはインドネシアの首都であり、首都圏人口は東京に次いで世界二位と言われています。イスラム教徒が九割程度を占め宗教色も強く、食文

鏡による定常観測を開始してもらう予定となっております。このサウジアラビアでの観測が始まれば、日本とペルーでの観測と合わせて、いよいよ太陽活動を二十四時間連続して監視し続けるネットワークが実現されることとなります。

さて、私は現在、このように大学附属の天文台に所属し、太陽・地球環境に関する研究活動に携わる事ができておりますが、これは津高在学時代に培った経験が大きく役立っていると思っております。津高生時代、私は天文部に所属しており、顧問をされていた京大・

化等も異なりますが、近年では本格的な日本食レストランも増加、外資ファッションメーカーも挙つて進出しており、外国人である私たちにとっても特に不便なく生活を送ることが出来ます。インドネシアの観光地というバリ島の方が有名ですが、その通り観光するところはなく、ジャカルタではショッピング以外するとは何もありません。しかし、ジャカルタから少し足を延ばすとまだまだ綺麗な海と素晴らしい自然が残っており、のんびりと過ごすこともできます。

さて、ここでジャカルタOB会の話題に戻りたいと思います。現在、メン

宇宙物理学教室出身の鶴山先生の計らいで、毎日屋上の天体望遠鏡で太陽観測をさせていただきました。また、それをまとめた結果を、三重大学の地学研究発表会で講演いたしました。その発表会を主催されていた教授が、実は現在私が働いている飛騨天文台の創設時の京大スタッフの一員でもあったのです。このような、現在の仕事に繋がっているような出会い・繋がりを作って頂いた津高の先生方や教育研究環境に、大変感謝している次第です。

(京都大学大学院理学研究科附属天文台飛騨天文台)

バーは六名でゴルフコンペを三ヶ月に一度、不定期で懇親会も開催しています。首都圏の有名高校OB会は存在しますが、地方高校のOB会は珍しく、「ジャカルタで高校OB会がある」と話す、皆に驚かれます。

年齢層も幅広く、所属会社の業種も様々で、現在の住まいも私以外皆三重県ではないのですが、ゴルフや懇親会で一度集まると地元の話や、高校時代の思い出話で大いに盛り上がります。一度、皆でカラオケに行った時に「津高の校歌を覚えてるか？」との話から全員で歌ったこともあります。また、仕事においても取引先の社長が津高先輩であり提案に繋がったこと、別の先輩とは初訪問の会社で偶然お会いし助けていただいたこともありました。こんなに遠く離れたジャカルタで高校の



写真・前列 左から藤原さん(S44卒)、伊藤さん(S43卒)、玉置さん(S53卒)
後列 左から曾我さん(H5卒)、保泉さん(S63卒)、稲垣(H8卒)

先輩方にお会いできるとは思っていませんでしたが、今更ながら津高の繋がりとというのは本当に有難く大事なものだ実感しています。遠い異国での生活は、ストレスも溜まりやすいですが、先輩方とのゴルフ、一緒にお酒を楽しむ、飲むことが私の楽しみです。これからも津高出身者であることの喜びを噛み締め、南国の青空の下、仕事にゴルフに励みたいと思います。

まだまだメンバーを募集しております。ジャカルタへ既に赴任されている方、赴任予定の方が見えたら、是非お声かけください！

(百五銀行国際営業部)



瀧上 昭憲 (昭和43年卒)

同窓会副会長をさせていただくことになりました瀧上昭憲です。「他にも適任者がたくさんおみえなのでは」とお断りしましたが、己の未熟さも顧みずお引き受けしてしまっただ次第です。

同窓会は、同期という横の繋がりとともに、先輩・後輩という縦の繋がりの両面性を持っています。横軸と縦軸が絡み合って、互いに紹介しあい、結びあい、人々と縁が広がることによって同窓の枠を超えた交流に発展していくことがあります。

卒業後、母校や同窓会に足向けることがありませんでした。二十年ほど

副会長就任のご挨拶



三藤 治喜 (昭和51年卒)

この度同窓会の副会長を拝命しました三藤治喜です。同窓会の運営に精一杯頑張っていく所存です。どうぞよろしくお願ひします。

我が家は、祖母が昭和二年三重校卒、

父が昭和二十三年陳川卒、母が昭和二十六年津高卒、妹と弟は学校群制度の振り分けで津西高校に行きましたが、私の一人息子が平成十七年津高卒です。家族のほとんどが津高にお世話になっています。昭和六十三年の同窓会総会でまだ存命だった祖母と父、そして私で三代卒業生ということ、他の何組かのご家族の方と一緒に壇上に上げ

前に仕事の関係で数回母校を訪れたこと、五年前三重県総合文化センターで開催された津高校創立一三〇周年・同窓会設立五〇周年記念事業に参加した程度でした。今更ながら母校の歴史の重みを感じています。

今年の同窓会のテーマは「繋ぐ世代を超えて」でした。繋がりを大切に、母校と同窓会の発展に向け、微力ではありますが、役員の方々とともに取り組んでいけたらと思っています。会員の皆さまのご支援ご協力を心からお願いいたします。

私の在学中は父がPTAの副会長を、そして息子の在学中に私がPTA会長を務めました。その関係もあり、津高が指定されているスパーサイエンスハイスクールの委員の仕事も、今も手伝わさせていただいています。

何かと津高とは縁が続いています。今後は先輩の方々、後輩の皆さんと一緒に津高同窓会を盛り上げていこうと思っています。よろしくお願ひします。(ミフジ株式会社 代表取締役社長)

津軽三味線に魅せられて

一年 駒田 早代

私は母の勧めで七歳から津軽三味線を習い始め、十歳から民謡も習っています。

小学校四年生の頃から津軽三味線を多くの人に知ってもらいたいと思い、同じ教室に通う三味線仲間と夏祭りな

ど地域のイベントや高齢者施設で演奏活動を始めました。

日本の伝統楽器である津軽三味線ですが、習い事がピアノではなく津軽三味線だといふことがなんだか恥ずかし、小さい頃はあまり周りの友達に言っていないませんでした。



しかし、津軽三味線を弾いたり、民謡を一生懸命唄うと、お客さんから拍手をいただいたり、「良かったよ」と声をかけてくださったり、「故郷を思い出した」と、時には感動して涙されます。このような経験から演奏活動を通してだんだん自信が持てるようになりました。

また、各地で行われている津軽三味線の全国大会でコンスタントに賞に入れるようになり、今年五月に津軽三味線の本場、青森県で行われた日本一決定戦のA級女性の部で優勝することができました。小さい頃から本場の青森の大会で優勝することが一つの夢だったので、達成できて本当に嬉しかったです。

そして、今年はずっと上達したいと思い、夏休みに宮城県仙台市にある師匠の家にショートホームステイをして初の一人旅をしました。仙台では色々な舞台を踏ませていただき、たくさんの経験をしました。

他の人の演奏を聴きながら、自分なりに時間をつまく使って課題が終わるよう頑張りました。

今年十月には青森県十和田湖で開催された、ご当地グルメで町おこしの祭典「B-1グランプリ」に地元三重県津市の団体「津ぎようざ小学校」から参加しました。地元津市をPRするパフォーマンスに津軽三味線で参戦してほしいと要請がきたからです。このような機会がある度に、私は本当に恵まれた環境にいると、つくづく感じます。津軽三味線を通してたくさんの人と出会い、関わり合い、貴重な経験をさせてもらっています。

そんな経験をさせてもらっている中で、私は大きな夢を持ちました。それは二〇二〇年に開催される東京オリンピックで演奏することです。世界の人々に日本の伝統楽器であるこの津軽三味線を知ってもらいたいです。そのために、これからも頑張っていきたいと思っています。

夏休みは学校の課題が多く、

長期休みという

ことで演奏依頼

も多かったため、

勉強と演奏活動

の両立が大変で

した。勉強道具

を持って行き、

飛行機の待ち時

間や大会の会場



十月に入り受験勉強も本腰を入れて取り掛かるこの時に、凄いとしか言いようのない肩書を持つ方の話を聞くというものは、少し重いのと思った。しかし、今、私は吉川さんの言葉に大変励まされ、この時期にこんな機会を与えられたことに感謝している。

講演のメインテーマは「未来設計図」

第五回有造塾に参加して

三年 森 結 香

についてだった。その中で私が特に心に残ったことは、目標に向かい、努力を続ける方法についてだ。吉川さんによると努力を続ける秘訣は、「できないことへの言い訳を捨てるべき」、「できない」を口にしないようにするべき、というものであった。確かに、成功の可能性がないと思いつつ努力をしても持続する精神がもたないだろう。それと同時に私は、いくら強い信念のある目標だとしても、努力を続ける途中で、人生の転じ方によって努力が無駄に感じてしまつのではないかと思った。しかし、吉川さんの不可能だと思われていたことを可能にしてきた体験を聞いて、努力次第で人生の転機を好機に変えられると実感した。高校卒業後、様々な挫折や成功を経験してきた吉川さんの人生の重みを感じた。そして、改めて努力はした分だけ自分に返ってくる

◆百三十五周年記念有造塾開催!

第 5 回

日時 平成27年10月9日(金) 14時30分～16時30分
場所 津高等学校体育館(全校生徒・同窓生対象)
〈演題〉「未来設計図」その作製と実現の方法
〈講師〉吉川 慎 二氏(昭和55卒)

進路状況

進路指導部 笹山 基 起 (平成5年卒)

平素より、本校の進路指導の活動にご理解・協力を賜り、ありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

さて、本校は、「高い知性と教養を持ったリーダーの育成」を目標に、日々の進路指導を行っております。この変化の激しい社会でたくましくリーダーとして活躍できるように、日々の「生活力」をベースに、「基礎学力」をしっかりとし、その学力を応用できる「実践力」、そしてその力を他者と協働して発揮できる「人間力」の養成を目指しております。その中におきましては、同窓生の皆さまにも協力をいただ

ものだと痛感した。
この先私は、社会に出て新たな人生を歩んで行く。自分の切り拓く「未来設計図」への期待と共に先が見えない不安もある。吉川さんが講演の最後で

「今日のことを時々思い出して欲しい」とおっしゃったように、何かに立ち止まってしまったときは、吉川さんの言葉を思い出し、また歩き出したいと思つた。

いており、改めてお礼申し上げます。

このような指導と生徒一人ひとりの努力が結実し、今春の進学状況については、国立大学二百三十名、難関国公立大学と医学部医学科には合わせて

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
(2015) H27年	192	38	780	11
(2014) H26年	230	51	766	16
(2013) H25年	207	34	535	14
(2012) H24年	237	26	762	21
(2011) H23年	186	43	668	8

※詳しくは津高ホームページをご覧ください。

	北海道	東北	東 京	一 橋	東 大	名 古 屋	三 重	三 重 医 学 大 学	京 都	大 阪	神 戸	九 州	慶 応 大 学	早 稲 田 大 学	同 志 社 大 学	立 命 館 大 学
(2015) H27年	3	2	3	1	1	22	60	4	12	14	5	1	5	13	92	106
(2014) H26年	7	1	4	0	0	15	68	10	10	14	11	0	2	17	76	116
(2013) H25年	10	1	4	1	0	8	66	9	15	17	12	2	3	17	59	70
(2012) H24年	6	1	5	1	1	17	65	10	13	26	14	1	4	11	88	101
(2011) H23年	8	3	2	2	1	14	47	10	10	18	9	1	12	17	75	91

七十四名合格することができました。また、私立大学にも数多く合格しております。この若き同窓生達がさらなる飛躍を遂げることを願っております。同窓会の皆様には、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

各地で同窓会開催

東京同窓会

本年度の津高東京同窓会は、五月三十日(土)、例年どおり霞が関ビル三十五階にある東海大学校友会館で開催しました。

出席者は二百八名と、東京圏の幅広

い年代の同窓生が集まりました。

まず、総会では、役員改選が諮られた田村会長が再任されるとともに、機動的な運営を図っていくための会則の改定が承認されました。続いて、東京同窓会田村会長の挨拶、飯田本部同窓会会長、小野校長のご祝辞をいただいた

後、親睦パーティに移りました。

お招きした恩師の佐野由子先生及び堀元昭先生からのご挨拶の後、富士路子さん(43年卒)による藤堂高虎の出世物語の浪曲、吉川慎二さん(55年卒)によるワインの楽しみ方のレクチャーがあり、奥田大阪同窓会会長の発言によりワインでの乾杯を行いました。恒例の席替えでは、在校時の居住地によりテーブル分けを行いました。比

較的狭い地域での情報交換により、ローカルな話題に花が咲き、タテの繋がりも確認できたようです。

新会員として、今春から東京の大学に進学された清水優孝さんと奥村莉子さんから挨拶があり、次いで来年度の幹事を代表して丹羽敏春さん(44年卒)が抱負を述べられました。

あっという間の三時間が過ぎ、最後に錦がよきさん(43年卒)の歌唱指導により校歌を声高らかに歌い上げ、来年度の再会を約して閉会となりました。

金丸直明(昭和43年卒)



名古屋同窓会

平成二十七年年度津高名古屋同窓会は百二十七名の先輩後輩が集い名古屋東急ホテルで九月十二日(土)開催されました。総会に先立って昭和四十年卒三浦佑之教授に古事記の神話について講演をして頂きました。長い歴史を短い



時間でわかりやすくお話しして頂き、神話の中に描かれている「人の生と死」、「私たち先祖の発想の仕方」、聞けば聞くほど興味深いものばかりでした。

懇親会では恒例の〇×クイズで盛り上がりました。今年は甲子園についての問題も出題され、多くの先輩方が甲子園の地で津高校歌を聞ける日が来るのを楽しみにされている様子でした。

今年の同窓会は初めての昼開催ということもあり、二次会へ足を運ばれた方も多かったのではないのでしょうか。来年の元気な姿での再会を約束しお開きとなりました。

田中千裕(平成20年卒)

大阪同窓会

第四十九回大阪同窓会が十一月八日に例年通り天王寺都ホテルにて、百三

十一名の参加を得て盛大に行われました。

奥田務津高大阪同窓会会長、来賓の方々からの挨拶を頂戴した後、志摩病院前院長・吉村 平様(よしむらひとし、44年卒)より「病氣、未病、その先!」と題して健康・長寿にまつわる大変興味深いお話を頂きました。

その後、人気親父バンド「レオフレンド」(44年卒の獅子の会で編成)の演奏を楽しみ、幹事年度全員に若者も入って懐かしいツイストで踊り狂い、更に「あの素晴らしき愛をもう一度」を全員で合唱して会場は大いに盛り上がりました。

最後に、現役大学生四名の紹介に続いて校歌を懐かしく合唱、記念すべき

五十回となる来年の同窓会での再会を誓って散会いたしました。

小菅眞生(昭和44年卒)



参加者募集

★第七回 学年対抗ゴルフ大会

学年対抗ゴルフ大会を開催します。

日程 平成二十八年五月八日(日)

場所 三重白山ゴルフコース

〇五九一三六二一四三三

参加費 一、五三〇円

(プレー費・昼食・コース売店・パーティー代・会費含む)

キャディは別途

定員 百六十名(定員になり次第)

※厳守 各学年三名以上十六名以内

※練習ラウンドの設定あり

※お問い合わせ・お申し込み先

津高同窓会事務局

〇五九一二九七三三一

物故者

謹んでご冥福をお祈りいたします

(平成27年10月15日現在) (敬称略)

旧職	水 室 庸 三	昭20④若菜(稲垣)賀代子
旧職(15)	中島(市川)彰子	昭23 前川(深江)好子
旧職	赤 田 登喜子	津高昭24 北 村 隆
陳川昭13	戸 澤 又 珍	昭24 田 端 忠 光
昭14	桧 垣 有 彦	昭25 古 市 直 巳
昭15	小林(国府)敬直	昭28 石 崎 徹 也
昭16	井村(前田)利晴	昭28 吉 川 澄
昭17	加 藤 政 男	昭28 内山(加藤)清子
昭18	岩 岡 日出夫	昭29 池村(福永)峯子
昭20	近 田 昭 彦	昭29 粉川(片岡)弘子
昭20④	川 原 啓 美	昭31 安藤(片岡)とし子
昭23	大 竹 節 男	昭31 西 井 晃
昭23	森 田 勉	昭31 吉 井 孝
昭24	中 山 隆 幸	昭33 今 堀 英 三
昭24	藤田(前田)一美	昭33 岡 田 克 彦
三重桜昭8	岡安(松本)きを	昭33 北 田 紀 芳
昭14	大 島 寛 子	昭33 中 嶋 義 均
昭20④	今北(田畑)千恵子	昭34 垣 野 隆
昭20④	大草(大井)敏子	昭36 伊 藤 川 光
昭20④	奥 山 フ ク	昭39 小 高 井 西
昭20④	加藤(中野)昊子	昭43 高 中 地 塚
昭20④	木下(藤井)公子	昭48 浜 赤
昭20④	木 村 臣 子	
昭20④	松田(小田)喜代子	
昭20④	横山(横山)春江	



平成二十七年(平成27年)度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが、八月一日

実行副委員長 八 太 淳之介(平成6年卒)

(土)、津センターパレスホール・津都ホテルを会場として、八六三名もの同窓生の方々に参加いただき、盛大に開催されました。

総会では、飯田同窓会長および小野学校長のご挨拶、物故者への黙とう、代議員会報告が行われました。

総会後のパーティーは、「第九回津軽三味線日本一決定戦」で優勝した津高校一年生駒田早代さんの素晴らしい演奏で幕を開け、開会から一気に盛り上がりしました。

歓談の後、幹事学年である昭和五十七年卒の実行委員が作り上げた「繋ぐ世代を超えて」と題したスライドショーが上映されました。昭和五年の

お知らせ

平成二十八年度 同窓パーティー

日時 平成二十八年八月六日(土)

午後三時より

場所 津センターパレスホール五階

津都ホテル五階

テーマ「今、回想のとき、そして、出発のとき」

担当学年幹事 昭和58年卒(代表 能仁 宏樹)

平成7年卒(代表 松山 洋介)

平成二十八年度同窓会

実行委員長 能 仁 宏 樹(昭和58年卒)

同窓の皆様におかれましては、益々健やかにお過ごしのことと存じます。

さて、来る平成二十八年度の同窓パーティーは、昭和五十八年卒と平成七年卒が担当させていただきます。

折しも、平成二十八年はここ三重の地で、各国の代表の方々をお招きして伊勢志摩サミットが開催されます。サミットに負けないおもてなしを、幹

事一同準備を進めて参ります。

三重の地で、日本中で、はたまた世界で活躍する津高同窓生。誇りを持ち、凛として過ごしていらっしゃる先輩方。

同窓パーティーが、同じ景色を眺めた仲間との思い出を回想し、明日からのそれぞれの元気の素になればと思います。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



旧制津中運動会の映像に始まり、世界で活躍する同窓生からのメッセージ、そして「恋するフォーチュンクッキー」

津高同窓会のホームページ

<http://tsuko.jp/>

メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331

で参加された皆様の手を繋ぎ、熱気は最高潮に達しました。

最後は、恒例の応援団演舞に引き続き、校歌斉唱で幕を閉じました。

至らぬ点多々あったかと存じますが、同窓生の皆様のご協力により、無事、総会・パーティーを終えることが出来ました。ご報告とともに、厚く御礼申し上げます。

事務局だより

○会報五十三号をお届けします。今回は三万五千二百部の発行です。

○第五回津高同窓会テニス大会は、十月十一日開催予定でしたが、雨の為中止となりました。

○事務局は、月・火・水・金曜日の午前九時十五分から午後四時十五分まで開いています。

○最新情報は、是非、ホームページをご覧ください。

○学校の三年間に亘る外構改修工事が終わりました。戦後よりのブロック塀が、四方ともサッシのフェンスに変わりました。

昭和九年にこの地に新築移転してから、正門の門柱と、蘇鉄の樹だけはかわらずに津高生を見守ってくれています。

